発行者　中央大学学員会　57ネット支部　http://hakumon57netjimdo.com/

2024年(令和6年)3月1日(第10号)

白門57ネット通信

～卒後40年記念号～

The 40th Graduation Edition

～table of contents～

●新会長挨拶
●前会長挨拶
●卒後40年記念祝賀会
●第100回箱根駅伝観戦記
●林家つる子さんを迎え、卒後40年記念落語会を開催
●研究活動
・「シバ研」活動を振り返って
・トリップ研究会(トリ研)活動報告に代えて
●全国分会だより
・北海道分会　総会と祝賀会に参加して
・関西分会
・九州分会
●会員から
・65歳と白門57ネット
・カープ狂の戯言
・不確実な時代の始まり・・・？
●編集後記

行動する知性。
中央大学

新会長挨拶

白門57ネット会員の皆さま、昨年10月に開催されました第21回定期総会において会長に就任いたしました池田冬彦（法学部政治学科卒業）です。

初代会長の舛森さんが会を立ち上げてから乗兼さん、浜田さん、浅野さんと続き、私が第5代目の会長ということになります。歴代の会長が築いてきた当会の歴史を引き継ぐこととなり、身の引き締まる思いであります。

前任の浅野会長時代（2019～2023年）はコロナウィルスの世界的蔓延により会の運営は大変な労苦を強いられました。しかしその逆風をオンラインミーティングの普及によって消し去ったばかりでなく、北海道・関西・九州の各分会会員の方々の参加を促すという副次的な効果をもたらし、結果的に会の運営は活性化した側面もありました。この４年間、浅野前会長の運営面でのリーダーシップに改めて感謝申し上げます。

昨年10月の総会と同日に開催されました久しぶりのリアルイベント「卒後40年記念祝賀会」には多数の方々にご参加いただきました。会員もすでに還暦を過ぎ、これからは65歳以上の「高齢者」として年金受給対象になってきます。今までは仕事の関係で参加しにくかった方々も、これからは時間的余裕もできて活動しやすくなってくると思われます。

今後の運営方針としては引き続き「ハイブリッド方式」とし、効率的なオンラインでのミーティングやイベントを駆使しつつ、皆が集まったほうが盛り上がるコミュニケーション系のイベントは極力リアルでの開催を推進していく所存です。併せて年 1 回発行の会報誌「白門57ネット通信」も拡充を図ってまいります。また、他の年次支部との連携も少しずつ推進していきたいと考えております。

これからも当会の創立時から続くスローガン「57ネットは我らのたまり場！」を具現化できるよう、精一杯頑張っていきたいと思います。会員の皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

池田冬彦

前会長挨拶

白門57ネットの会員の皆さん、昨年まで会長を務めました浅野昌宏です。
白門57ネット通信第10号の発行にあたり、一言お礼を申し上げます。

2019年秋の総会にて、第4代の会長に就任しましたがその翌年の2月、豪華客船でのコロナから端を発し、あれよあれよと言う間に世界が一変しそこからは皆さんもご経験された様な状況に陥り、リアルな会の運営はままならなくなってしまいました。そもそも同期会は、会員個々人の健康や世の中の安寧があってこそのモノであり、それらに優先されるべきものでは無いと考えます。そのような状況下において、当会17年の歴史を途切れさせずその翌年に迎える卒後40周年まで細々とでも良いから会を存続させることが重要であると感じておりました。幸いにも、ZOOMを導入し直接は会えないもののオンラインの画面上で皆に会う事が出来た事がそれを可能にしてくれました。

今となってはZOOMによる打ち合わせも当たり前の風景になりましたが、導入当初の頃のぎこちないやり取りを懐かしく思います。直接会えずにオンラインで会わざるを得なくなった事も悪い事ばかりではありません。
57ネットには関西分会・九州分会・北海道分会と言う3分会がありますが、これら分会の役員の皆さんとはオンライン上でお会いすることが出来、親しくなれたことはプラスの面の一つです。

これからは会員の皆さんも本格的に第2の人生を考える時期に入られることと思いますが、この年齢になってからもただ大学の同窓で同期と言うだけで友人になれる同期会と言うのは、とても貴重な場所であろうと思います。
57ネットは初代会長から数えて5代目の会長まで進んで来ましたがこれからの57ネットに期待頂きぜひ積極的にご参加頂ければと思います。

前会長　浅野　昌宏（経済学部卒）

卒後４０年記念の祝賀会

駿河台キャンパス

我々が1982年に中央大学を卒業してから昨年（2023年）で、41年目を迎えました。当時はまだまだ青い若者だった我々がこの年月に社会にもまれ、還暦を過ぎる年にまでになったことを、皆さんご自身が感慨深く思っていらっしゃるのではないでしょうか。

「グッドビューダイニング」にて

昨年の40周年はコロナ禍で開催できなかったため、2023年10月28日（土）に、第21回の定時総会に合わせて卒後40年記念の祝賀会を開催しました。
会場は今年の4月に開校したばかりの中央大学駿河台キャンパス。懇親会はその19階の「グッドビューダイニング」。多くの仲間が集い、一人一人の自己紹介と、応援歌、校歌で盛り上がりました。

広報役　三上　彰久（法学部卒）

第１００回箱根駅伝観戦記

1. 往路

箱根駅伝は、今年も1月2日午前8時の号砲とともに幕を開けた。2024年は第100回記念大会であり、シード10校のほか、予選会から13校が選抜され、合計23校が参加した。

わが中央大学は、昨年同様、1区のスタートでダッシュした溜池一太君（文2）がそのまま行くのかと思われたが、駿河台大学のレマイヤン選手のハイペースについて行くのをあきらめたのか、それとも体調不良か、急に後れ始め、戸塚中継所では19位と出遅れてしまった。

こうなると、われわれの期待は2区の吉居大和君（法4）に集中する。昨年区間賞の吉居君の出だしは好調だったが、追い上げなければというプレッシャーか、最初の3キロから5キロのオーバーペース（？）がたたったのか、はたまた体調不良か、彼自身の記録に遠く及ばないタイムで区間15位となり、ここで総合順位は17位となった。

この展開にわが57ネットの諸君からは嘆息が漏れた。こうなると、昨年3区で区間賞の中野翔太君（法4）に期待が集中するわけだが、何と中野君も吉井君同様、体調不良のためか、調子の出ないまま区間20位と沈み、総合順位は18位となった。

この予想外の展開に、57ネットの諸君は落胆し、「どうしたんだ？　もうだめか？」の声も聞かれた。しかし、私を始め2、3名から「まだまだ大丈夫。湯浅君がやってくれるよ」と呼びかけ、この声が届いたのか、4区の湯浅仁君（経済4）は、何と区間3位（区間1位との差は34秒）の好走を見せ、小田原中継所での総合順位を13位（10位の法政との差は41秒）と上昇させた。

われわれは、「この上昇機運を5区へつなげろ！」と声援を送ったが、5区はルーキー1年生の山崎草太君（文1）であり、「そんなに期待しては可哀想だよ」という声もあった。山崎君は順調に箱根の山を登り、芦之湯の最高地点付近で区間16位と、なかなかペースが上がらなかったものの、下りに入ってから徐々にペースを上げ、区間14位でゴールし、総合順位の13位をキープするとともに、上位との差を縮めた（10位の順天堂との差は18秒）。

往路は、序盤1区から3区までをエース級の選手をあてた駒澤大学が大きくリードしていたが、3区から5区までにエース級の3人をあてた青山学院大学が3区で逆転し、4区・5区でリードを広げ、往路優勝を決めた。青山学院の作戦勝ちと言えよう。青山学院が往路新記録を打ち立てたせいで、復路は16校が繰り上げ一斉スタートとなった。

2. 復路

復路は、1月3日、前日とは打って変わる晴天となり、午前8時から往路優勝の青山学院を始めとする上位7位までの大学が時間差スタート、往路8位の大東文化大学以下16校が繰り上げ一斉スタートを切った。

わが中央大学は、6区で浦田優斗君（経済3）がスタートから好位置につけて区間賞ペースで追い上げを見せる。大平台あたりまでは区間賞の法政大学の選手と併走するなど、大いに楽しませてくれた。結果は区間5位の好走となり、総合順位を10位に押し上げた。

続く7区は、吉居駿恭君（法2）がスタートから絶好調の走りを見せ、途中で兄の吉居大和君から給水を受け、4位の東洋大学を抜き去り、結果は区間賞となった。次回は区間新記録を目指して頑張っていただきたい。総合順位は10位のままだが、平塚中継所の通過順位は4番目であり、われわれを大いに楽しませてくれた。ここまでの合計タイムなら、復路優勝も狙えるのではないかという期待が膨らんだ。

8区は前年までの2年間は5区山登り（一昨年5位、昨年3位）を担った阿部陽樹君（文3）が走った。前年までの好走にわれわれの期待が高まったが、体調の悪さからか、序盤からペースに乗れず、遊行寺の坂ではかなり苦しそうで見ていられないほどであり、「頑張れ!」と叫びつつ応援した。結果は区間22位となり、総合順位も12位となった。阿部君にはまだ来年があるので、是非、次回は区間賞の走りを見せてほしい。

9区は箱根デビュー戦の白川陽大君（文2）が当日のエントリー変更で走ることになった。デビュー戦ということもあり、自分のタイムを刻みながら走っていた。監督からの指示があり、無理のない走りをしていた。おそらく、来年を見据えた走りを考えたのだと思う。結果は区間16位であり、上位選手から1分の遅れとなり、総合順位は13位となった。

10区アンカーは、期待のルーキー柴田大地君（文1）が任された。新八ツ山橋では区間5位の力走を見せていた。かなり苦しそうだが、シードまでおよそ1分の差を詰めるべく実力いっぱいの走りを見せた。期待どおりの走りで、残り3キロの時点で区間9位と健闘していた。しかし、追い上げなければというプレッシャーとの戦いでオーバーペースとなったのか、最後の3キロで力尽き、区間9位、総合順位は13位となった。しかしながら、次回につながる力走に感動した。

復路も青山学院が終始リードを守って完勝し、総合記録10時間41分25秒の大会新記録で総合優勝を果たした。2位は駒澤大学、3位は城西大学であった。

復路10区を力走する柴田大地選手（文1）

3. 総括

今大会は13位でシード校から落ち、次回は今年10月に行われる予選会からのスタートとなった。往路の不振に関する藤原正和監督の談話にあったが、エントリー選手16名中14名が体調不良のまま本大会に臨むこととなった。今年のメンバーは吉居大和選手を始めとして有力選手が揃ったのだが、いかんせん体調不良では戦う前に勝敗は決していた。大変残念な結果に終わったが、これから1年間、捲土重来を期して、選手の体調管理という最低限の「守り」に徹していただきたい。

来年は、4年生となる阿部君、浦田君、山平君、3年生となる白川君、溜池君、吉居君、吉中君、2年生となる柴田君、本間君、山崎君らが中心となってトレーニングに励み、また、1年生として入学する期待の新人諸君の頑張りにも期待したい。そして、来年は、今年逃した優勝の美酒に酔わせて頂きたい。これが中央大学卒業生全員の願いである。

以上。

57ネット副会長　石口　修（商学部卒）

多摩キャンパス　改修後の陸上競技場

林家つる子さんを迎え、卒後４０年記念落語会を開催

11月12日(日)、神保町の出版クラブビルにおいて卒後40年記念落語会として「林家つる子独演会」を開催しました。当日は、真冬を思わせる寒さの中、他支部を含め45名が駆けつけ、4年ぶりのリアル開催となる落語会を楽しみました。

池田会長の開会挨拶に続き、藤音頭の出囃子でつる子さんが登場すると、会場からは「真打昇進おめでとう！」との声が上がり、最高の雰囲気の中、1席目は、創作落語の「スライダー課長」を披露。野球が題材となっており、体を張った熱演に会場は爆笑に包まれました。

1席目が終わると、今回の特別企画インタビューコーナーで、司会の乗兼さんの質問に、真打昇進の喜び、師匠の正蔵とのリアル「タッチ」秘話から、女性目線の落語への思いなどを語ってくれました。

仲入り後は、吉原の花魁・高尾太夫と真面目が取り柄の紺屋職人の純愛を描いた人情噺「紺屋高尾」で、観客の感涙を誘いました。この日は男性目線での噺でしたが、「芝浜」「子別れ」に続き、花魁目線での「紺屋高尾」にも挑戦していくとの話もありました。

終演後、池田会長から、つる子さんに金一封の目録を贈呈した後、御礼の挨拶では、時折涙を浮かべながらも「二ツ目になりたての頃から、お世話になっています。その頃を思うと、こんな日を迎えることができるとは思いませんでした。これからも打たれ打たれて強くなっていきます」と力強く決意を語ってくれました。そして、つる子さんを囲んだ記念撮影で、思い出を刻み付け、落語会は終了しました。

その後、近くの居酒屋に場所を移し、着替えを終えて駆けつけたつる子さんを迎え、参加者の最長老である白門30会の堀合様の乾杯で懇親会がスタート。狭い会場の中、つる子さんはテーブルごとに移動しながら、参加者からの励ましと応援の言葉に、満面の笑みで応えていました。最後は、この落語会の準備からサポートしてくれた浅野前会長の中締めで名残を惜しみつつお開きとなりました。

また、今回は初の試みとして、白門57ネット会員限定で、当日の収録動画を期間限定(12月24日～1月8日)で、視聴申込者にYoutubeで配信を行い、地方分会、当日会場に来られなかった会員の皆さん30名以上にもつる子さんの熱演を楽しんでいただきました。

落語会実行委員会　竹林　聡(法学部政治学科卒　埼玉県)

研究会活動

「シバ研」活動を振り返って-As of End 2023 -

シバ研の活動の中心である、現在は春と秋に定期的に開催されるコンペも既に22回を数えられることとなりました。

ここ数年は、春と秋の年2回定期開催(現在は大月CC-山梨県)に加えて、年末または年始での有志の参加による懇親ゴルフ会(山田GC-千葉県)も開催できるようになりました。
ほぼ毎回参加していただいている10数名のコアメンバーと、スケジュール調整がついた際に参加いただけるサポートメンバーにより毎回3～4組での、スコアではない和気あいあいでのゴルフを通した懇親を図っています。ですので、シバ研には何とドラコンが無いのです！

まだ現役で仕事を続けている方が多いため、開催は日曜日或いは祝日の開催としていますが、平日開催への移行を検討する日も近いのかなと感じています。

一方で、地方支部の皆さんともゴルフを通じて交流できればというのが世話人としての”野望“です。支部の皆さんからの、「声がけ」をお待ちしております。そうなれば、「トリ研」との協調開催もできることとなり、白門57ネットのさらなる活性化につながって欲しいと願っております。

尚、次回第23回シバ研コンペは2024年5月12日(日)に大月カントリークラブにて開催されますので、ゴルフ好きの皆さんの参加をお待ちしております。
(連絡先 tada999@docomo.ne.jp)

シバ研世話人 多田 弘之(法学部卒)

第22回シバ研(秋季)ゴルフコンペ@大槻CC

第19回シバ研(春季)ゴルフコンペ@大槻CC

大月カントリークラブの美しい紅葉

トリップ研究会（トリ研）活動報告に代えて

役員・運営委員の旅行会お世話係をしております乗兼です。

残念ながら昨年も旅行を見送り、ご報告できませんので、皆さんには「旅行会社の取り組みの一例」を、弊社（JTB）が運営メンバーとなっている「ホノルルフェスティバル」でご紹介したいと思います。

＊歴史のおさらいを少し

日本とハワイの交流は明治元年の日本人初渡航から始まり、1885年の日本ハワイ両政府間の契約による移民（官約移民）以来140年に及ぶ歴史を積み重ね、四世・五世の人々にまで受け継がれています。そして現在ハワイの人口の約5分の1を日系人が占め、コロナ前は年間150万人以上もの日本人が訪れるといった、政治的にも経済的にも不可分の緊密な関係を築いています。

＊「ホノルルフェスティバル」について

日本とハワイ双方の人々が旅行を通じて相互往来するだけではなく、お互いの歴史と文化をさらに深く知り、草の根レベルでの真の交流を促進することを目的とし、1995年3月に「第一回ホノルルフェスティバル」が開催されました。主催するホノルルフェスティバル財団の主な構成組織はホノルル市・ハワイ州政府観光局・地元企業・JAL・JTB 等で、日本各地のお祭りや神事をはじめ文化・芸能・武道・スポーツなど様々な分野の皆様に、ホノルル市街の複数会場での演舞・カラカウア大通りのパレード・地元の方々との交流などの機会を提供してきました。私も1998年から2002年まで「輸送担当」として、JAL カーゴ、日本通運海外輸送チームとともに、全国のお神輿や山車、太鼓、だんじり、ねぶたの輸出入と現地での各会場へのお届け・回収を担当いたしました。

日本の参加メンバーからは、多くの観客の前で自分たちのパフォーマンスを発揮できたことにたくさんのお礼の言葉をいただきました。また、日本の唱歌合唱や琴・三味線・大正琴での演奏に涙する現地日系人の方々の姿も多く目にしてきました。途中コロナ禍による中止もありましたが、今年も第28回として3月8日～10日に開催されます。

＊グランドフィナーレは「長岡花火」

ご存じの通り、太平洋戦争の口火となった真珠湾攻撃を指揮した、山本五十六連合艦隊司令長官の出身地は長岡市です。また長岡市も終戦の月に米軍航空機の空爆により多くの被害を受け、約1500名の尊い命が奪われています。長岡市は戦時下では中止となっていた長岡花火を、終戦の翌年に復活させ、以降慰霊と平和を願う毎年の恒例行事となっています。

時は巡り、2007年ホノルルで開催された「日米市長交流会議」で、当時の長岡市長とホノルル市長の会談を経て、かつては敵同士だった両市が結びつき交流していくことで、日米の友好関係の深化・平和への貢献を目指し、2012年に姉妹都市締結がなされました。そして姉妹都市交流の象徴としてホノルルフェスティバルフィナーレでの長岡花火打ち上げが実現しました。アメリカではお祝いの意味合いが強い花火ですが、打ち上げのコンセプトを「火薬を戦争ではなく、平和への祈りと鎮魂のために使う」とし、日米両国関係機関の協力により実現させることができました。ちなみに最後まで許可を出さなかったのは「ホノルル航空管制」とのこと。夕方のワイキキ上空は軍・民間航空機のラッシュアワーの時間帯で、花火による空路封鎖は「最長で20 分間に留める」が落としどころだったそうです。

今年も3月10日、長岡花火がホノルルの夜空を彩ります。戦争・紛争・天災・各種感染等で、世界中に幸福とは程遠い環境の人々が多くいらっしゃいます。ホノルルからの「平和の祈り」が世界中に届くことを願ってやみません。

トリ研世話人　乗兼　浩明（法学部卒）

全国分会たより

関西分会

卒業後41年を迎え、社会人人生も終末を迎える方々が散見される様になりました。私も2023年7月末で41年間勤めました会社を定年退職致しました。365日が休日となる環境に突入し、日々の生活を有意義に過ごそうと試行錯誤を続ける今日この頃です。

その中で、関西分会長の奥田さんの計らいによる久々の会食が、2023年11月7日(月)ホテルグランヴィア大阪フレンチレストラン「フルーブ」にて開催されました。

メンバーは10月28日の定期総会に一般参加された姫居さん、奥田分会長、そして関西分会の平井さん、礒野と、京都に仕事で出張中の濱田久美子さんの5名です。今までコロナ禍で引きこもっていた為、2019年12月7日にホテルニューオータニ大阪の会食以来4年ぶりの集合開催になります。

当然話題の中心は学生時代の事になりますが、関西人にとっては八王子市の広大なレイアウト？に対する衝撃が一番インパクトが強かったみたいで、姫居さんと平井さんの学生アパートに対する思い出話で盛り上がりました。徒歩圏内にスーパーがないとか、まわりが田畑しかないとか・・・今後も少人数でも構わないので、このような機会を設けていきましょう。

振り返れば2023年は、野球(WBC、NPB)、バスケットボール、ラクビー、バレーボール、サッカー日本チームの活躍で盛り上がりました。特に関西は、NPBでは阪神VSオリックスの「日本シリーズ」と「阪神タイガース日本一」が特筆されます。また、最後の締め括りとしては、Jリーグでの「ヴィッセル神戸リーグ優勝」になります。スポーツ以外も含めて2024年も関西からの盛り上りを期待したいと願っております。

礒野洋一(商学部卒)

九州分会

九州分会は、当初、当時の浜田会長の下で設立前後に私を含む役員4名がわずかに顔合わせを行いましたが、その後、新型コロナウィルスの影響で分会全体のイベントは一度も開催されていません。

これまでは、ZOOMによる参加で、57ネット役員運営委員会、オンライン懇親会、林家つる子オンライン落語会、箱根駅伝オンライン応援会などに参加してきました。このように、実際のところは私は九州分会長というよりは57ネット東京本部の「遠隔会員」といった状態です。

昨年4月の役員運営委員会では、卒後40年記念祝賀会検討グループ、街歩き検討グループ、落語会検討グループの3つの活動予定が採択され、私は落語会検討グループに参加させていただきました。オンライン会議を通じて開催に向けた議論を重ね、さる11月12日に神保町出版クラブで行われた林家つる子落語会にグループの一員として参加させていただきました。

私はつる子さんにご持参いただいたCDで出囃子の音出しを担当しました。子供のころから大の落語好きとして、スイッチの On,Off のみによるCDの音出しだけとはいえ、真打昇進を控えた彼女の演目に関わることは非常に光栄な経験でした。

一方で、落語会検討グループの私以外のメンバーの方々は、開催候補のいくつかの会場の下見、のぼりや屏風、座布団など様々な備品の準備、映像・音響の事前準備、司会進行、そして落語会終了後の懇親会の手配まで、幅広い作業に大変な苦労をされました。また、運営委員会の会計担当の方々は、受付業務だけでなく、遅れてくる方のため最後まで会場外に待機し、つる子さんの落語を聴くことが出来なかったとのことで、心苦しい次第です。深く感謝申し上げます。

今年はなんとか九州分会としての活動を再開し、分会役員との協議を進め、次回は実りの多いご報告ができることを願っています。

九州分会会長　原田秋彦(商学部会計学科卒　福岡市)

北海道分会　総会と祝賀会に参加して

昨年10月28日に開催された総会に、北海道分会から初めて出席させて頂きました。

北海道分会は、コロナが蔓延する前の令和元年に、浜田元会長の声掛けでキックオフミーティング（初顔合わせ）を行い、翌年1月に設立準備会を開催して役員体制を決定し、4月に浅野前会長ほかを招いて設立祝賀会を開催する予定でしたが、コロナ禍でのこの3～4年間、自由な会合には制約があり、満足な活動ができない状況でした。

この間、浅野前会長や役員の皆さんのご尽力により、ZOOMを活用しての役員運営委員会やオンライン落語会などに参加させて頂き、皆さんと顔を合わせる機会が生まれました。

総会の会場には、役員による事前準備があるため早めに会場に向かいましたが、既に到着していた浅野前会長から「初めまして」と挨拶され、実はちょっと（とても）面食らいました。そんな私に浅野前会長は「阿部さんとはいつもZOOMで会っているけれど、直接会うのは初めてですよね！」と付け加えて頂き、私もようやく「初めまして」と言うことができました。「そうだよな。皆さんと直接会うのは初めて何だよな」と思い直し、自分としてはちょっと笑ってしまいそうな出来事になりました。

総会出席は9月始めに決め、早速、往復の航空券を早割で予約しました。朝5時43分発の新千歳空港直行のバス、エアドウの朝一便に乗り、この機会を利用して「茗荷谷キャンパスに行ってみよう」「お茶の水キャンパスや旧校舎の跡地周辺を散策しよう」「日帰りで公共交通機関を使って自宅まで帰ってこよう」と計画しましたが、「思い」と「実行」はなかなか思うようには行きません。

新千歳空港では、オンラインチェックイン手続きに不安となり、保安手続きに20分以上並んだ上に優先通過を促されました。茗荷谷キャンパスには「前日」にグーグルマップで「行った」ことにして当日は省略。初めて総会に出席し、その後の楽しい祝賀会での出会いと会話の後、羽田空港に直行しました。

これで一安心と思ったのも束の間、搭乗機は機材繰りによる遅延で30分遅れ。搭乗機は早割・安価購入のため変更が不可の中、結局、羽田空港では2時間待機し、新千歳空港に帰ってきた時には既に搭乗予定のバス運行は終了し、結局、札幌市内からタクシーに乗り、自宅に着いたのは23時43分。18時間の長旅になりました。

総会では、会員の皆さんの結束の強さを感じ、祝賀会では皆さんとの会話も楽しかったのですが、一番の衝撃は「ビールジョッキの自動注ぎ機（？）」の存在です。東京にはこんなものがあるのかと思ったところ、東京のメンバーも「初めて見た」と言っていたので、何だか最先端の最新マシーンに触れることが出来た感じで、もしかしたら一番の収穫であったかもしれません。

いやいや、失礼しました。大阪の奥田分会長を初め、会員の皆さんに直接お会いし話をすることが出来たのが一番の成果で、歳を取るにしたがって出会いの機会が少なくなる中、これからも同期の繋がりを大事にしたいと思います。

北海道分会会長　阿部　浩文（法学部卒）

会員から

６５歳と白門５７ネット

この57ネット通信がいよいよ創刊10号、かつ卒後40周年特集ということで執筆を申し込んでしまった。57ネットが会報「57ネット通信」を発行する契機となったのは、学員会から活動支援費として10万円支給される要件の1つに会報の発行があったから。

2014年（平成26年）の12/1 日、広報役の尽力により創刊号が発行され年 1 回発行を続け、今回記念すべき二桁となる第 10 号を迎える事となった。

2024年・令和6年の年が明けた。今年は大半の中大57卒の同期は65歳を迎える事と思う。この僕は早々の今年2月に満65歳となってしまう。自営の方々を除くいわゆる僕のようなサラリーマンにとっては職場状況により異なるが退職するか70歳まで働くかどうかの決断を迫られている。どっちにしても転機がいよいよ来てしまう。

さて時々思うことがある。各々の方々の置かれている環境により、おのずと今後の人生の選択肢は異なるであろうが、この57通信をご覧いただいている僕みたいな方々には「白門57ネット支部」という我らのたまり場があること、これは「人生のタカラ」だねって思う。そしてたまには皆さま、ふと立ち寄ってみてほしい。

今手元にあるコロナ直前の2019年・令和元年 12/1 日に発行された57ネット通信第6号を見てみると、「中大落語会」が林家つる子さん高座であり「マーちゃん散歩」というハイキング、お酒と居酒屋を愛する「イザ研」、1泊旅行の「トリ研」、ゴルフの集いの「シバ研」、そして57ネット総会と各種の集いがあり、仕事等々を抱えながらも57ネットって楽しくやってるねって思ってしまいます。
いずれにせよ2024年の今年は、コロナ禍という言葉があったことが懐かしくなるほど普通な行動が出来ることをまずはみんなで喜びたいですよね。

さて少し57ネットの歴史なるものをさかのぼると、現在の57ネットは年次支部の中では通信可能な会員約600名を包する大きな規模の同期支部となり、年次支部全60支部のうち他地域に分会をもつ4支部の一角を占めるに至っている。
発足は2002年・平成14年、当時40歳初頭の3名の同期が自ら学員会に対して「57同期の支部を作る」と申し出してから今日まで21年間、会長も昨年10月の総会で交代した現在の池田冬さんが5代目だ。地域分会設置への拡大は2016年・平成28年に大阪を拠点とする関西分会から始まり、2017年・平成29年には博多を拠点とする九州分会、2019 年・令和元年には札幌を拠点とする北海道分会が産声をあげている。65歳を契機に白門の OB・OG 力を強めるためにも、もっと平たく言えば中大卒という共通項を持つ仲間と東京以外の地域でも集い、楽しく繋がりを作っていこうね・・って事ですよね。

先ほど57ネットの会長は現会長が5代目と記した。平均すると会長の期間は約5年となる。先輩・後輩支部にも多く見られる一人の会長が10年以上も留まっているケースだが、57ネットは何故かそうならない。たぶん世間でよく言われる「トップが変われば新しい風と活性化が生まれる」事、これは組織の大小にかかわらずそうなる事を僕たち57同期は認知しているからだと思う。年次支部だから20年先、30年先のいつかは解散する「時」まで57ネットの良き伝統にしていきたいと感じている。

浜田英明（商学部会計学科卒　埼玉県）

カープ狂の戯言

この会報を読まれる皆さんは、同世代、同じ大学で学ばれておられる方々ですので共有されている記憶も多く、断片的でもわかってもらえる、アレ、ソレ、が多々あると思います。

例えば「野球」。大学2年のときを思いだすと嬉しくなりますね。あの大学野球日本一の記憶です。新宿のビアガーデンで浮かれ騒ぎ、歌舞伎町コマ劇前の噴水に飛び込んだ記憶があります。
あのときの中大からは、小川、高木、熊野、香坂、君波、尾上。なんと6選手も、その後プロ球界で活躍することになるのですから強かったわけです。ちなみに決勝の相手、早稲田大学の主将は、「アレ」の人でしたね。
さて今回の私のテーマはプロ野球です。アレの大学野球日本一から下ること5か月くらい後、プロ野球史上に残る屈指の名シーンがありました。のちに山際淳司氏がナンバー創刊号に書き起こした「江夏の21球」がソレです（ちなみに山際さんも中大OB）。そこから私はカープ狂になりました。さらに翌年の日本シリーズも同一カードの広島-近鉄と、当時、史上最も地味な対戦カードが2年続いてしまったと揶揄されたものです。しかし白熱のシリーズはいずれも第7戦までもつれ込み、記憶では生協前の特設？テレビを囲んで観戦していたように思います。その場の雰囲気がなんとなく近鉄ファンが多く、流石中大生は渋いな、と妙に感心した記憶があります。
光陰矢の如しで、それから40年を超える歳月が流れました。今振り返ると広島カープは、あの2年間がカープ史上最も強い時代でした。ただ私のカープ熱はとどまるところを知らず、ついにKindleから電子出版いたしました。年末のできたてほやほやです。

書名は『広島東洋カープ 1949-2023 図書・雑誌完全ファイル』。カープ本はもちろん、カープに少しでも関係する図書約600冊の書誌解説と雑誌約930冊の内容紹介を行いました。図書の種別・発行順に配列し、年次ごとの戦績もかませて立体的に楽しめるように工夫してあります。10年以上の歳月をかけた力作（笑）です。
ぜひ amazon でググってみてください。　岡　日出夫（文学部哲学科卒　神奈川県）

不確実な時代の始まり・・・・？

2024年は年始より能登半島地震・羽田空港の航空機衝突事故等、大変な年始め（箱根駅伝のシード落ちもショック）となりました。被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。また、復旧に従事されている皆さま、お疲れ様です。安全に留意されご活躍ください。

世界に目を転じると、ロシアによるウクライナ侵攻も、イスラエルによるガザ攻撃も終わりが見えません。災害も戦乱も事故も、想定を超えるリスクに直面する時代のようです。翻って自分自身はというと世の激変と向き合っている方々には申し訳ないくらい、例年通りの穏やかな正月を迎え1月5日にはいつも通りの仕事始めを終えました。サラリーマン生活42回目の仕事始めです。本日は1月7日。平穏ないつもと変わらぬ年の初めです。

・・・

原稿を前に「今年の抱負は？」などと考えてみるのですが、どうにも落ち着きません。正月気分はとっくに吹き飛び、漠とした不安があり、抱負や目標など考えられないようです。今年の電気学会誌1月号の巻頭言は、元電気学会会長の山口氏の寄稿でした。これからの電力システムには次の3つの要件を持つ司令塔が必要と述べています。

① 全体像の把握
② 長期的視点
③ 不確実性への対処

今年、あるいは今の時代の目標・心得としても当てはまりそうです。特に大事そうなのは「不確実性（リスク）への対処」でしょうか。「備えあれば憂いなし」と言いますが備える事は難しくても、せめて「発生する可能性がある」事は意識したいと、年頭に改めて肝に銘じました。

私事ですが、来月は65歳となり定年退職を迎えます。仕事と職場、お客様にも恵まれ、今と同じ職場で同じ仕事を続けそうです。ニッチな領域でもあり、来年もこの職があるのかは分かりません。不確実性の時代ですから「何が起きても不思議はない」と、おおらかに（大雑把に？）構えたいと思います。

会員の皆さまにとりまして、この1年が安全と健康に恵まれた年となりますよう祈念いたします。本年もよろしくお願いします。

以上

太田　一雄（理工学部電気工学科卒　東京都）

編集後記

白門57ネット通信は、2014年12月1日に第一号を発行して、11年目を迎え、年内に発行できず、曲がり角に来たようです。

今年は、元日から能登半島の地震、日航機の火災事故など起こり、また、ウクライナの戦争、ガザ地区の紛争と嫌なニュースが続いていますが、コロナが漸く収まる兆しを見せ、人々の生活も戻りつつあり、商店街も活気づいてきた面もあります。

白門57ネット通信も何とか工夫して刊行を続けたいと思っています。

原稿を寄せて頂いた方に、心より感謝申し上げます。

広報役　土屋　隆一（法学部卒）